

学校名	南部町立南部小学校	執筆者名	田中 将
研究タイトル	主体性を発揮し、多様性を受け容れる資質の育成		

① **育てるべき資質や能力**・・・自分で設定した未来を担う子どもたちを育てるべき資質や能力について、その必要性を踏まえて記述する。(1ページ程度)

主に育成すべき資質/能力のキーワード

主体性の発揮・多様性の受容  
(1)自己認識力及び自己調整力 (2)対話力

## 1 未来を「拓く」子ども像

現代社会は、テクノロジーの急速な発展やグローバル化による価値観の多様化などの様々な要因が絡み合い、これまでの常識やマニュアルが通用しにくい、将来の予測が困難な時代である。

小学校学習指導要領解説においても「学校教育には、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」と示されている。つまり、学校教育において、「何を学ぶか」に重点が置かれていた従来の方針から、「何ができるようになるか」を重視する方針に大きくシフトしたと捉えることができる。

こうした現状を踏まえ、様々な課題に立ち向かい仲間とともに未来を拓いていく子ども像として、「自分や自分たちにとっての幸せ(モノ・コト・ヒトの価値)を見いだしたり、生み出したりすることができる子」を設定する。

「自分や自分たちにとっての幸せを見出す」とは、誰かに与えられる価値や正解を妄信的に追い求めるのではなく、自分を取り巻くヒト・モノ・コトとのつながりの中で、自分自身との対話を重ねながら「なりたい自分像」を見だし、追求しようとすることを指す。つまり、主体性を発揮することである。主体性を発揮することは、困難な状況や急激な変化に対する順応力や対処力、自己成長力などにもつながっていくと期待できる。

また、「自分や自分たちにとっての幸せを生み出す」とは、「なりたい自分」の追求の中で、自

分を取り巻くヒト・モノ・コトと折り合いをつけながら、新たな価値を生み出そうとすることを指す。つまり、多様性を受け容れることである。多様性を受け容れることは、社会的な調和と共感を生み、仲間とともに未来を拓いていくことにつながっていくだろう。

以上のように、複雑で予測困難な現代を生き抜き、未来を拓いていく子ども像を「自分や自分たちにとっての幸せ(モノ・コト・ヒトの価値)を見いだしたり、生み出したりすることができる子」と捉えるとともに、そうした子どもを育ていくためには、主体性を発揮しながら、多様性を受け容れる資質を育成することが重要であると考ええる。

## 2 育てるべき資質・能力

主体性を発揮し、多様性を受容する資質を育成するうえで必要な資質・能力について、具体的な視点を以下に述べる。

### (1)自己認識力及び自己調整力

自己認識力及び自己調整力とは、自分自身を理解し、自分の価値観や興味を認識し、必要に応じて調整する能力である。その人の主体性を支え、自分自身や自分と他者との関係性を客観視するという点でも必要な能力であるといえる。

### (2)対話力

対話力とは、相手と理解の共有を築き上げるための能力である。自分の意見を表現する力と、相手の話を理解する力を組み合わせながら、自分の考えや価値観を押し付けるのではなく、互いに納得のいく結論を導こうとする姿勢もまた対話力の育成には欠かせない。

- ② **子どもたちの現状**・・・子どもたちの置かれている環境や状況、学習レベルなどを客観的に把握することによって収集した情報に基づき、子どもたちの現状について記述する。(1～2ページ程度)

### 3 子どもたちの現状

前章では、未来を拓く子ども像に向けて、主体性を発揮し、多様性を受け容れる資質を育成する必要性について述べた。また、育成すべき具体的な資質・能力として、自己認識力及び自己調整力や対話力を示した。ここでは、子どもたちに関わる総合的な現状分析を通して、これらの資質・能力に関する子どもの実態を捉えていく。

#### (1)子どもたちが置かれている環境や状況について

本校が所在する南部町は、人口1万7千人ほどの山間の町である。南部藩発祥の地としての歴史的教育資源をはじめ、おもな産業である農業の体験や近隣商業施設への見学などの体験学習や、豊かな自然を生かしたフィールドワーク、議会見学の学習プログラムなど様々な教育資源が存在する。

本校は、令和5年度に旧南部小学校と旧向小学校が統合し、新たなスタートを切った。1年生から6年生までの単学級と2つの特別支援学級の8学級で構成されている。全校児童128名である。それぞれの学校の特色や子どもの特性がよい刺激となり、新しい学校文化を作り上げているところである。

##### 【現状の捉え(1)】

- ・豊かな教育資源（歴史、産業、自然、行政等）
- ・教育に協力的な行政
- ・統合後も安定している学校生活

#### (2)学習レベルについて

本校の学習レベルを把握するうえで、令和5年4月に実施したNRT標準学力検査の結果を指標として活用する。

<NRT 偏差値>

教科	偏差値	50
国語	51.4	■■■■■■■■■■■
社会	50.1	■■■■■■■■■■■
算数	48.8	■■■■■■■
理科	50.1	■■■■■■■■■■■

#### <5段階評価別学力分布>

4%	23%	36%	35%	2%
■	■	■	■	■
1	2	3	4	5

#### <傾向と対策>

##### ■国語

- ・わかったことを資料に書き込む活動を通して、根拠を明らかにする力をつける。
- ・作品への意見や感想をもたせながら、文章を読む力をつける。
- ・作文（観察文、報告文なども含む）の書き方を育てる。
- ・話し合い活動の充実により、立場や主張の違う他者を意識して、多面的・多角的に話し合う力を育む。

##### ■算数

- ・表やグラフ、図から適切に情報を読み取る力を育成する。
- ・問題文を最後まで読み、聞かれている内容を理解する力を育成する。

##### 【現状の捉え(2)】

- ・学習レベルに関しては偏差値から、平均的なレベルであること
- ・学習に困難さを抱えている児童が、約3割ほど
- ・根拠を明らかにすることや意見や感想をもったり、伝えたりすることが課題
- ・情報の読み取りや文章内容の理解に課題

#### (3)学習場面や行事等における子どもたちの現状

##### ■学習場面

- ・令和5年4月に全校児童を対象に実施した算数科の学習アンケートでは、5段階評価で、「めあてを決めて取り組んでいる」2.8点「授業後どんなことが分かったか言える」2.6点の上記2項目に比較的低い傾向が見られた。他教科においても同様の傾向が見られる。

### ■行事や生活場面

- ・言われたことを素直に実行する真面目さが見られる。反面、例えば、運動会で選手を応援したり、全校レクリエーションで、異学年グループ内で自己紹介をしたりするといった自分の判断で行動してもよい場面において、どうすべきかわからず、指示を仰ごうとする児童が少なからず見られる。

#### 【現状の捉え(3)】

- ・めあてをもって主体的に学習に取り組んだり、学習を自分事として定着させるための振り返りの場面において見られる課題
- ・自分から進んで行動する場面に課題

### (4)子どもたちの現状と育成すべき資質・能力

ここまで、3つの視点で、子どもたちの現状について捉えてきた。これらを踏まえ、育成すべき資質・能力（自己認識力及び自己調整力や対話力）の現状について整理していく。

#### ①自己認識力及び自己調整力の現状

前述の学習アンケートにおいて「めあてを決めて取り組んでいる」「授業後どんなことが分かったか言える」という項目が低い結果だった。また、

学校行事においても、自分から進んで行動する場面に消極性が見られた。学習レベルは平均的であることからすれば、決して努力を怠っているというわけではない。そこから浮かび上がる子どもの姿は「言われたことや決められたことはこなすが、自分で考えて行動することが苦手」というものである。こうした主体性の低さの原因は何か。それは、自己認識を深め、自分の興味関心の対象を見いだす経験や、自己選択や自己決定の経験などの不足にあると考える。

#### ②対話力の現状

前述のNRT標準学力検査の結果において、根拠を明らかにして意見や感想を伝えること、情報の読み取りや文章内容の理解に課題が見られた。自分の意見や感想を伝えることは、対話が始まるきっかけの部分である。また、情報の読み取りや文章内容の理解は、聞き手として相手の感情や立場に共感を示しながら、相手の話を要約したり、相手の意図や要点を確認したりして、対話のキャッチボールを続ける準備となる。そこに、課題が見られるということは、本校児童の対話力は、決して高い状態にあるとは言えないだろう。

③ 教育支援の方針・・・収集した現在の情報に加え、過去の実践経験や知見（失敗）なども踏まえ、教育支援の方針を記述する（2～3ページ程度）

## 4 これまでの実践

教育支援の方針策定に先立ち、本校の子どもたちの現状認識に加え、これまでの実践を振り返って、改善点を見いだしていく。

### 1 総合的な学習の時間の実践

#### (1)単元名「ぼくらの公園プロジェクト」

(2022.10月～実施)

#### (2)単元概要

6学年の総合的な学習の時間の単元として設定。学校周辺に公園をつくってほしいという児童の願いが単元設定のきっかけとなった。自分たちの理想とする公園イメージを膨らませながら、公園をつくるためにどんなことが必要なのかを調べ、最

終的には行政側にプレゼンテーション形式で提案する会を設けた。

#### (3)授業の実際

##### ①「どんな公園にしたい？」イメージ共有

社会科の時間に、地方自治体や議会の仕組みや役割について学んだ。その時、児童の一人が「議会に地域住民として要望をあげることができるのなら、学校の近くに公園を作ってもらえるようお願いすることもできるのかなあ。」とつぶやいた。周りの数名もそれに呼応するように「学校の近くにも公園がほしいって町に提案したいなあ。」と話した。普段からあまり自分たちの「したいこと」を表現しない子どもたちからの提案だった。

これはチャンスであると感じ、総合的な学習の時間を使って取り組むことを約束した。

理想の公園については、4人グループでひとつの提案をすることにした。グループ編成後、グループ内でどんな公園にしたいか意見交流をおこなった。意見集約や発言が苦手な子の手立てとして、話し合いの内容はグーグルスライドにメモできるように準備した。話し合いは活発に進んだ。「滑り台は必要だ。」「東屋もあればいいね。」という感じでエスカレートしていった。そう感じた子どもから「いくら何でも公園にできる広さは限られているだろう。」という意見が出された。そこで、想定する公園の面積を20m×10mに制限することにした。また、予算はどのくらい使えるのかも気になりだしていたので、役場の担当者とメールでのやり取りし、情報収集を行った。こうして徐々に現実的な話し合いになった。図1、図2は、中間発表前の児童の提案したい公園イメージである。

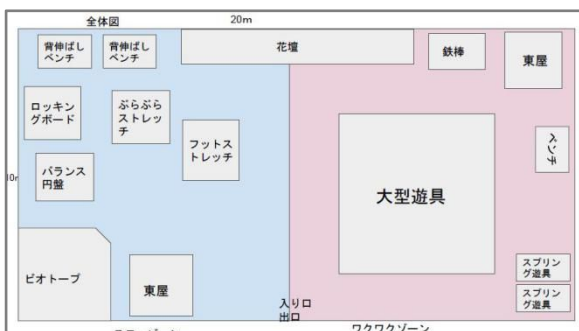


図1 公園の遊具の配置を示して提案する班

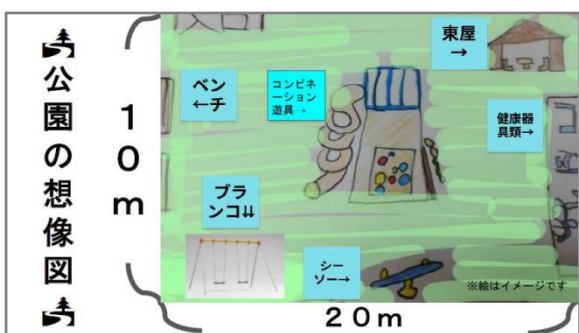


図2 公園の遊具をイラストにして提案する班

## ②中間発表会

中間発表会では、南部町教育委員会から2名のゲストティーチャーを招き、それぞれのチームの提案を発表した(写真1)。事前のメールのやり取りで、多くの住民の利益になるようにすることや使える予算にも限界があることを伝えられてい

た。しかし、子どもたちは、公園の面積は想定に入れながらも、設置する設備に関しては自分たちの願いが詰まったフルスペックの公園を提案した。

発表後に、ゲストティーチャーから次のようなコメントをいただいた。

- ・子どもだけではなく多くの世代を意識して提案しているところがよい。
- ・設置遊具が予算に合わない可能性がある。
- ・公園はつくってからでも維持費がかかることも考えて提案する必要がある。



写真1 中間発表会の様子

大人を前にして自分たちの考えをしっかりと提案できたことに手応えを感じているようだった。どちらかといえば、人前では消極的な子どもたちだったので、発表に不安を感じている子が多かったが、自分たちの願いが本単元のきっかけになったということもあって、モチベーションを保ったまま、アドバイスをもとに最終発表に向けて、自分たちの発表をブラッシュアップしていった。

## ③最終発表会

最終発表会は、教育委員会の全面協力をいただき、南部町議会の本会議場で行うこととなった。提案する相手は、教育長をはじめとした教育委員会の方々と決まった。

ここに至るまでのブラッシュアップの過程では、議論が白熱し、仲違いをおこしかけたグループもあった。そのグループは、ひとりが予算重視の現実路線を主張し、残りが利用者の満足度を高める必要を主張した。話し合いは、いつまでたっても平行線をたどっていたため、教師が仲裁に入り、折り合いをつけた。本気であるからこそぶつかることもある。しかし、本来であれば、対話を通して子どもたちだけで解決してほしかった場面である。

スキルとしてもマインドとしても、対話の重要性を改めて感じた。

このような紆余曲折を経て迎えた当日。数名の保護者と新聞社、役場広報担当が見守る中、最終発表会が始まった。写真2は、地元新聞に掲載された発表時の様子である。



写真2 デーリー東北新聞社に掲載された記事（抜粋）

発表会では、発表するグループ以外の子もたちは、質問や感想を述べる役割を担った。どのグループも堂々とした発表ができた。また、質問や感想を述べる姿にも年度当初に比べると自信が湧いてきたように感じた。

最後に、教育長からコメントをいただいた。子どもたちが町のことを一生懸命に考えていることに感謝を述べるとともに、町の税金と絡めながら、これからもいろいろな切り口で南部町を盛り上げて行ってほしいとのことだった。

公園プロジェクトを通して、たくさんの大人とかわり、仲間たちと議論を交わす中で、一人一人に、それぞれの形の「地元への愛着」が芽生えたように感じる。そのような変容が感じられる子どもたちの感想を以下に紹介する。

<児童の振り返りカードより>

- ・南部町も少子高齢化が進んでいることから、公園や保育施設を充実させることは大事だと思いました。そのために、就職しても都会ばかりではなく、南部町にも税金やボランティアなどで貢献することが大事だと思いました。
- ・南部町は、子育てにやさしい街で、給食費無料や医療費負担をしてくれていることがわかりました。でもそれは、税金でやっているから南部

町で働く人がいないとこれもなくなってしまう。だからわたしは、大人になったら南部町の役に立つために頑張ります。

#### (4)成果と課題

○子どもたちの「やってみたい」を出発点に単元を構成することで、モチベーションを維持する効果が見られるとともに、主体性を引き出すことができた。

▲総合的な学習の時間では、教科で身に付けるべきスキル（対話、論理的思考、客観的視点など）を生かすことで、より効果的に学びに向かうことが分かった。各教科で身に付けられるスキルと総合的な学習の時間で必要となるスキルを関連付けながら単元を構成する必要がある。

## 2 理科の実践

### (1)単元名「電気と私たちの生活」

(2023.1月～実施)

#### (2)単元概要

本単元のねらいは、生活の中などで使われている電気に着目し、電気の性質や働きを調べる活動を通して、発電や蓄電、電気の変換についての理解を図ることにある。その上で、わたしたちの生活が、電気の働きによって豊かになっていることに気付くとともに、限られたエネルギーを大切に利用しようとする態度を育てていきたい。

#### (3)授業の実際

本時の中心的な活動は、手回し発電機を豆電球やモーターなどに並列でつなぎ、家庭内で電気を利用するときの再現をするというものである。本時を設定した理由は、生活の中で使われている電気に着目させたかった点にある。この視点がないと、手回し発電機や光電池の性能を調べるという学習にとどまってしまう恐れがあるからだ。

前時までに、発電所が発電する仕組みと手回し発電機が発電する仕組みが原理的に似ていることを理解している。こうした前提のもと、子どもたちに次のように投げかけた。「家の中でいろんな家電を同時使えば、発電所はどうなるんだろう。実験で確かめられないかな。」子どもたちからは「発電所がいっぱい発電しなくてはいけない。」

とか「発電が追いつかなくなる。」といったつぶやきとともに、確かめてみたいという意欲を見せた。子どもたちと設定した学習問題は「家電製品を使う数は、発電所にどのような影響を与えるか。」とした。

実験方法は、家庭で電化製品を使うモデルとして写真3のような回路を組み、家電製品につないだ数と手回し発電機の手応えの違いを記録していた。

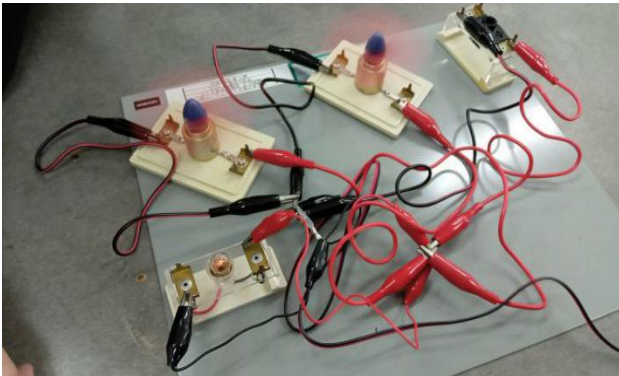


写真3 電化製品を使ったときのモデル実験

結果は、子どもたちの予想通りだった。しかし、たくさんつなぐと手回し発電機の手応えが重くなることを自分の感覚で確かめたことは意義がある。また、この結果はあくまでもモデル実験であり、ここから、生活の中の電気の利用について、考察していくことこそ大切な活動だと考える。

子どもたちは、この結果をもとに次のような考察をした。「電気を使えば使う程、手回し発電機の手応えは大きくなることから、家の中でたくさんの電化製品につなぐと、発電所の発電機はたくさん回らなくてはならない。」

振り返りのコメントには、「省エネすることが大切だということが分かった。」とか「電気をつけっぱなしにすることがあるから、気を付けたい。」といった自分たちの実感をもとにした感想をまとめる児童が多く見られた。

#### (4)成果と課題

○モデル発電所の実験を通して、子どもたちが、生活の中の電気の利用について自分事として捉えた感想をもつことができた。

▲実験の記録に関して、科学的に捉えようとする視点が不足していた。数値や回数等の定量的な

記録を進んで選択できる力を育成していきたい。自己認識力及び自己調整力を高めるためには、客観的視点をもつことが重要である。そこで、理科の学習において「科学的な見方や考え方」を養っていくことが、自己認識力及び自己調整力の育成につながっていくと考える。

## 5 教育支援の方針

子どもたちの現状とこれまでの実践で得た知見を踏まえ、「自己認識力及び自己調整力」「対話力」を高めるための教育支援の方針として、以下のように策定する。

### <教育支援の方針>

#### (1)自己認識力及び自己調整力の向上

##### ①「振り返り」の目的理解

- ・出来事や自分のしたことを振り返ることを通して、自分と向き合うことが目的である。なりたいたい自分に近づいているかを日々意識することが、自分の成長につながることを理解させる。

##### ②「毎日5行メッセージ」に取り組む

- ・子どもが振り返りを継続することで、自然と自己認識力や自己調整力を育てるためのツール。

##### ③日常生活を「科学する」学習活動を設定

- ・理科は、科学的思考習慣を身に付けられる教科のひとつである。日常生活との関連を意識した授業を通じて、客観的根拠をもとに多様な視点から考え、判断する力を充実させることにより、自己を冷静に捉え調整しようとする態度につながっていくと考える。

#### (2)対話力の向上

##### ①対話のルールを理解やスキルの習得

- ・「相手を傷つける発言はNG」「話を最後まで聞く」「意見より質問して相手の考えを理解」などといった対話のルールを理解させる。国語の授業を中心に、対話に必要なスキルを身に付けさせる。

##### ②必要感をもって対話できる学習活動を設定

- ・自分たちで作り上げる課題やオープンエンドの課題といった学習活動を設定し、必要感をもって対話する機会を設ける。

④ 実行計画と準備状況・・・教育支援の方針をもとに、「自分がいつ、何をどのように行うのか」具体的な実践や行動に落とし込み、来年度以降の実行計画と準備状況を明確に記述する。（3～4 ページ程度）

具体的な工夫のキーワード

「毎日5行メッセージ」「日常生活×科学」「PBL」

## 6 実行計画と準備状況

### (I)自己認識力及び自己調整力の向上に関する計画

#### ①「毎日5行メッセージ」でなりたい自分へ

(2024.4月～)

「毎日5行メッセージ」とは、学校生活の1年間を毎日「4つの視点」を使って振り返る活動を通して、自分と向き合い、成長を実感したり、新しい気付きを得たりする日記のようなワークシートである。「4つの視点」とは、「やってみよう」「ありがとう」「なんとかなる」「あなたらしく」の4つのキーワードで示す。

○「やってみよう」：自分が好きなことや心がワクワクするようなことができたか。

○「ありがとう」：周りの人にありがとうと思えることがあったか。

○「なんとかなる」：うまくいったこともそうでないこともポジティブに考えられたか。

○「あなたらしく」：自分らしくいられたか。

この視点は、前野隆司氏（慶應義塾大学大学院教授）が提唱している「幸せの4因子」の考えを取り入れさせていただいた。この4つの視点は、学校生活に見られる様々な目標やめあてとは少し役割が違う。それは、この4つの視点は今後ライフステージが上がっていても活用できるということである。この振り返り方を身に付け、続けていくことで、自分との向き合い方がより深く広くなっていくだろうと考える。それはまさに、「自己認識力及び自己調整力」を高めていく営



みに他ならない。

2022年10月～12月に「毎日5行メッセージ」の施行版に取り組んだ。図3は、そのワークシートの抜粋である。このような振り返りのワークシートを約3か月間続け、子どもたちの記入する内容が、どのように変化したかを分析した。着目したのは、感情を示す言葉の出現数の変化である。感情を表す言葉とは「うれしい」「かなしい」「楽しい」といった言葉である。これらの言葉の出現数が多くなれば、より深く自分と向き合い、自己認識力が高まったと言えると考えた。子どもたちの記入した内容をテキストマイニングで分析した結果が表1である。

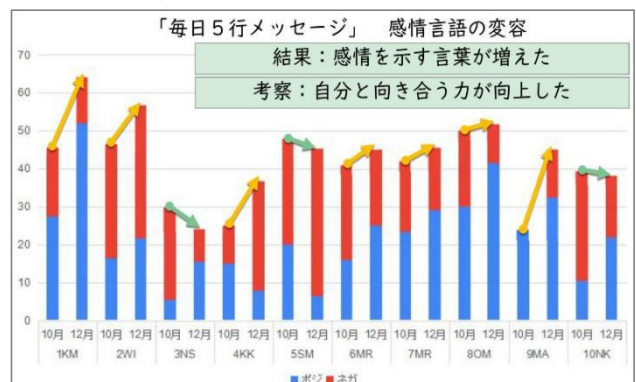


表1 「毎日5行メッセージ」のテキストマイニングによる分析

10月と12月の個人比較において、矢印が右肩上がりになっていれば感情を示す言葉の出現数が増えたことを表す。表1からは10人中7名に増加傾向が見られた。「毎日5行メッセージ」を継続することが自分と向き合う力の向上に少なからず影響を与えていると言えるのではないだろうか。

今後は、一人1台端末を活用して、「毎日5行メッセージ」をデジタル版にリニューアルし、記入内容の整理や分析を自分自身でも行えるように工夫することで、さらに自己認識力や自己調整力の向上に役立てるようにしていきたい。

## ②日常生活を科学しよう

### 第6学年理科「水溶液の性質」(2024.11月～)

日常生活は科学にあふれている。しかし、我々が「科学のメガネ」で見ようとしなければ、それはただの景色となる。硬い爪を小さな力で切り落としてしまう爪切りの仕組みも、湯船の底のお湯が冷たくなっていることも興味深い事物・現象である。しかし、文部科学省による全国学力・学習状況調査において、我が国の科学的な事柄に対する興味・関心・意欲の低下は大いに懸念される結果となった。それと同時に、理科の学びで養われるべき「客観的根拠をもとに多様な視点から考え、判断する力」も低下している。この結果は、自己を客観的に捉え、よりよい自分へ調整しようとする力にも負の影響を及ぼしかねない。だからこそ、理科の授業の充実が重要であると私は考える。

では、どのように充実させていくのか。それは、理科の有用性を感じられるような日常生活との関連した単元構成であろう。

そうした考えのもと、ここでは、一例として、6年理科の「水溶液の性質」を日常生活に関連付けた単元計画を述べていく。

#### 【単元構成案】

■単元名「水溶液の性質」6学年

■実施予定 2024年11月

#### (1)洗剤入りアルミ缶破裂事故の謎を追え

単元導入では、2023年5月に発生したアルミ缶破裂事故を示し「この事故の原因を自分たちで解明しよう。」と学習の動機づけを行う。その後、水溶液の溶質による性質の違いを調べ、酸性やアルカリ性、中性といった液性の種類やものによって液性の強さが違うこと学ぶ。そこまでの知識をもとに、導入で提示した大きな問題に取り組む。

#### (2)予想と実験計画

予想の段階では、アルミ缶が破裂した事故について、考えられる原因をできるだけ出し合う。想定される子どもの予想は、水溶液がアルミ缶に触

れて、①火薬のように爆発した②缶の中にガスが発生し圧力が高まった③アルミ缶自体が膨張した④水溶液が沸騰したなどである。いずれの場合においても「仮にそうであれば、こうなるはずだ」という見通しをもちながら、どんな実験をしたら確かめられるかを話し合い、自分たちで実験方法を決め、実験に取り組む。

#### (3)実験・結果・考察・結論

次に、各グループで考えた実験を行い、結果を黒板やタブレット上で共有する。そして、各班の結果をもとに、「なぜアルミ缶が破裂したのか」について考察を述べ合う。必要に応じて再実験に取り組み、結論を出す。

以上のように、理科の他単元においても、日常生活との関連を図りながら単元を構成し、教科書の実験だけで問題解決を行うのではなく、自分たちで実験方法を発想したり、自分たちの言葉で考察をまとめたりする点に力を入れていきたい。そして、生活に関連する客観的根拠をもとに多様な視点から考え、判断する力を養っていきたい。

## (2)対話力の向上に関する計画

### ①「PBL」で豊かな対話力を(2024.10月～)

対話力の向上に必要なことは、マインドとスキルと機会の保障だと考えている。

マインドは、対話のルールを学ぶことで伸ばしていく。前述(5-(2)①)のとおり、対話は、基本的に相手を否定しない。互いの違いや共通点の中から、両者が折り合いをつけて納得した結論に至るプロセスにこそ価値があるからだ。これは、多様性を受け容れる資質を育成する上でも最も重要な考え方である。

また、スキルは、相手の話に相槌を打つ、意見ではなく質問を多くする、などがある。なぜそのスキルが必要か理由をしっかりと納得したうえで、身に付けられるように留意していきたい。

さらに、対話を行う場合は、正解か不正解かを確かめる学習課題は適さない。授業者は、その点を考慮して単元構成を工夫する必要がある。



そのような考えのもと、ここでは、総合的な学習の時間を使ったPBLの単元計画を述べる。

~~~~~

### 【単元構成案】

■単元名 「南部町 PR 大作戦」 6 学年

■実施予定 2024 年 10 月～

#### ■単元概要

本単元は、自分たちのふるさと南部町を PR するための「ふるさと自慢 CM」をつくる活動を軸として展開していく。単元前半（小単元Ⅰ）では「何を紹介するか」、後半（小単元Ⅱ）では「どのように紹介するか」を探究課題として設定する。

小単元Ⅰで追究する課題は、南部町の「特色やよさ」である。はじめに、青森朝日放送主催の「ふるさと自慢わがまち CM 大賞」の作品を提示する。わずか 30 秒の動画の中に、それぞれの地域の自慢を折り込み、豊かな表現方法で作られたこれらの作品は、児童の興味関心を高めると同時に、単元を通しての具体的なイメージを共有するという点でも非常に有効なコンテンツであると考えられる。この動画視聴をきっかけとして、「自分たちもこのような CM を作って、南部町を宣伝してみたい。でも、CM をつくるにはどんなことが必要だろう」という課題設定につなげ、それぞれのテーマについて詳しく調べる活動に取り組む。そして、調べたことを整理して、紹介したい内容がよく伝わるように「キャッチフレーズ」をつくることを小単元Ⅰのまとめとする。

小単元Ⅱで追究する課題は、小単元Ⅰで作ったキャッチフレーズを軸にして、自分たちが伝えたい南部町の特色やよさを効果的に伝えるためにどのような映像を作るかということである。はじめに、CM づくりに必要な知識・技能として、CM の様々な表現方法を知ることと、構想を練るための絵コンテのかき方を学ぶ。これらを共通の土台として、グループのテーマに沿った CM づくりを始める。CM づくりは、以下の 4 つのステップで行う。①グループごとに CM の構想を考え、企画書にまとめる。②企画を提案し、他のグループからの助言をもらう。③助言をもとに試作動画の作成に取

り組む。④試作動画を視聴しあって感想をまとめる。このような活動を経て、単元最終には、CM づくりを通して気付いた自分たちの町の特色やよさを想起させながら、これまでの学びを通して身に付けたことや自他のよさを振り返らせたり、自分の生き方を考えさせたりする活動を行う。

#### ■単元全体の流れにおける指導上の工夫

小単元Ⅰでは、単元の見通しを持たせ、主体的に取り組むように促す必要がある。そこで、CM として紹介する内容のテーマは、歴史や文化、特産品などをある程度限定して提示するが、基本的にはグループで相談して自由に選択させるようにする。

南部町のよさを調べる活動では、自分と地域とのつながりを強く意識することができるよう、できるだけ地域の人との交流を大切にしていきたい。具体的には、南部町役場商工観光課の担当者や、特産品等の生産者や社会教育の関係者などに対して、インタビューをしたり、アンケートを配付して考えを聞いたりするなどの直接的なやり取りを行っていく。

キャッチフレーズを考える活動では、「要点」「要約」「キーワード」など国語科で学習したことを想起させながら取り組ませ、調べたことを網羅的に扱うのではなく、そのエッセンスを表現するように支援していく。

小単元Ⅱでは、まず CM の様々な表現方法を学ぶ。その際、「ふるさと自慢わがまち CM 大賞」に出品された作品を分析する活動を行う。そして「ドラマ系」「ランキング系」「音楽ダンス系」など、表現方法のジャンルを分類整理する活動を行う。こうした活動を通して、それぞれの表現方法が持つ効果を話し合いながら、自分たちの作品にどのように生かすのか見通しを持たせる。

また、絵コンテを学ぶ際は、絵コンテの持つ役割や意味を理解させたいうえで、その方法を理解させる。さらに、既存の CM を使って、その映像を見ながら絵コンテをつくる体験を行う。あくまでも、絵コンテは、グループ内での共通理解や他のグループへ伝えるためのツールであることを意識

させ、あまり細部にこだわりすぎないように心掛けさせたい。

CMの構想を練る活動では、全体の概要がつかめる程度の絵コンテを作成するとともに、紹介したいことのテーマ、キャッチフレーズと設定理由、アドバイスをもらいたい点などを明記した企画書をまとめる。ここでは、絵コンテのコマ数は3～4枚とし、全体の概要がつかめる程度のものになるように留意する。

企画書をもとにグループで考えたCMの構想を紹介する活動は、ポスターセッション形式で行う。グループ内で、発表する担当と他の班の発表を聞く担当に分かれ、ローテーションするというものである。数回の発表で全員が一度は発表とアドバイスを行うというように設定する。このようにすることで、説明を人任せにできない状況をつくり、一人ひとりが、自分たちの企画を自分事として説明できるようにしたい。なお、この発表形式で行うことは事前に知らせておき、グループ活動で主体性を発揮できるように促す。

これら活動を通して、互いのよさや表現の違いを受け入れながら、地域や自分の生き方に対する考えをもつことができるようにする。

~~~~~

以上のように、自然と対話が生まれるような単元を設定することで、対話力の向上に必要なマインドとスキル磨いていきたい。

## 7 おわりに

複雑で、予測困難な時代である。しかし、閉塞感のある日本が変われる大きなチャンスなのかも知れない。子どもたちには、これまでの常識とかわれることなく、仲間とともに、自分らしく前向きに未来を拓き、幸せな人生を送ってほしい。そう願いながら、少しでも彼らの一助になれるようにこれからも授業改善に励んでいきたいと思う。